

堀先生の思い出

寒 蟬 義 一

堀先生と私との出会いは、私が昭和2年に福井中学校へ入学したときからで、昨年先生がなくなるまで、半世紀にわたる長いおつきあいであった。

その頃の福井中学校は、当時の大島校長の方針で、文検合格の先生方が大半を占めており、勉学に精励する精神に満ちていた。堀先生もその1人で、ひまを見つけては部厚い本を読んでいた姿が、今でも印象的に残っている。当時は植物・動物・岩石鉱物・生理衛生等の学科をまとめて博物といっており、博物室には堀先生と原田先生がおられた。私たち悪童どもは、堀先生にはコンニャク、原田先生にはワニという失礼なニックネームをつけていた。原田先生のワニは口の大きいことに由来するが、堀先生のコンニャクはどのようなわけか知らなかった。ずっと後になって先生にお伺いすると、いつも寝不足でいたため、体がクニャクニャしていたためだろうとの事である。これも後になってから聞いたことであるが、先生の若い頃は机に向かって勉強し、机の上でうたた寝をする生活で、寝床に入って寝るのは稀であったとの事である。とにかく猛勉強家との印象は、われわれ悪童どもの肝に何らかの刺激を与えたにちがいない。しかし、どのようなわけか、私は原田先生にお習いする機会が多、堀先生には3年のときに岩石鉱物を習っただけである。それでも、今の学校でいうクラブ活動に相当するものか、あるいは先生方の自発的行為によるのかはわからないが、両先生につれられて三里浜や永平寺へ植物採集に出かけたり、深谷へ方解石をとりにつれられて、先生には大へんかわいがられた。

このようにして、私もいつのまにか先生の影響を受け、文検受験を思い立ったのであるが、生来愚鈍な上に怠け者であるためになかなか受からなかった。そしてやっと予備試験に合格したとき、その報告のため先生を訪れた。多分6月頃であったと思う。すると先生は「今日から本試験までの休日は、出来る限りお前につきあうからそのつもりでおれ」と申された。かくて、日曜日毎に先生につれられて県下各地の山野へ出かけた。私にとっては、たまの日曜日で朝寝坊をしたいのであるが、先生の熱意にひかれて、時にはいやいやながら出かけたものである。今から思うと、私自身のためでありながら、心がけの全く出来ていないことをなげなく思うと共に、先生の後輩指導についての情熱をありがたく思う次第である。それにしても、先生の博覧強記はまことにおどろくべきもので、県下各地のどこに何があるかを、我が庭の如くすべて覚えておられるのである。このことは後に博物館の資料蒐集のため、先生のお伴をした時にも、改めて痛感させられた。目標となる物の少ない細い曲りくねった道をさっさと歩かれ、やぶの中に入られたかと思うと1本のシダをとられ、これがオオバノハチジョウだと教えてもらったことが今でも記憶に残っている。また、シラカシ、アカガシ、ウラジロガシ等のカシは嶺北にも見られるが、ウバメガシやツクバネガシは嶺南へ行かなければ見られないことも教えてもらった。このような2人だけの採集行は十数回行なわれ、愚鈍な私の頭にも分類と分布の大要がおぼろげながらも刻み込ま

れた。このようにして秋に行なわれた本試験にのぞんだのである。本試験は分類・生理・細胞・遺伝等についての面接試験である。分類以外のものは自分で本を読んだり実験したりすれば大体わかるが、分類は多数の実物を見なければどうにもならないのであるが、私は先生のおかげでこの方面の準備が出来たのである。したがって、大部分の人が最も苦手とする中井猛之進先生の分類についての質問にはすぐに答えることが出来た。そして、中井先生からはその場で、君は他の部屋の結果を待つまでもなく合格だといわれ、大へんうれしく思うと共に、先生のご恩をしみじみ味わった。

その後、戦争や戦後の混乱時代をあわただしく過したのであるが、何といっても郷土博物館の創立は先生の生涯における大事業であったように思われる。私も先生のご恩に報いる機会だと思い、出来る限りの協力をしたつもりである。この博物館創立については他の方がいろいろの角度から書かれると思うので細部については省略するが、熊谷市長の期待にこたえるべく、先生が心血を注いでおられたことが先生の言動のはしばしからうかがわれた。また、他の協力者たちも並々ならぬ努力をはらい、実によいチームワークであった。これは、先生の学識や情熱もさることながら、先生の人徳のしからしめるもので、単に役所からの一片の協力依頼によるものではない。もし、先生が中心的存在でなかったなら、博物館の建物は出来ても、形骸のみの内容の貧弱なものになっていたに違いない。まさによき人にめぐりあえて創立されたのである。先生が逝かれて、改めて先生の偉大さを認識せずにはおられない。郷土博物館は自然科学博物館と名を変え、益々発展しているが、足羽山に白亜の殿堂のある限り、先生の名は消え去ることはないであろう。

(仁愛女子高等学校)